古暖簾(賞)

水野仙子

居ない、と斷へばそれまでだもの、面會せはすまいと思つた菊川の女將は意外だつた。女中は早速紅緒の草履を板の間に並べた。意氣に曲げて結んだ帯の女中に導かれて、通つたのは六疊の間、少し陰氣ではあつたが、丸く抉つた窓の竹を通して、青葉が勢よく繁つて居た。間もなく女將が自ら茶菓を運んで來た。

『ま、お敷きなさいましよ』

とわざと増枝が脇に退けて置いた座蒲團をすゝめて、改めてお辭儀をした。

『毎度前田さんには御贔屓になります』

などゝも言つた。

初めて此様な場所に足を踏み入れ、初めて此種の女に接した増枝は、習慣上理由もなく對手を蔑む心と、呑まれまいと頭を擡げる性來の勝氣とで、胸は板のやうに強張つて居た。

『ホゝほんにねえ、今のお若い方は……』

と吸ひつけて出した煙管を、女將は笑ひながら自分で

吸つて白い煙りを吐いた。

バタ／＼と草履の音がして女中が女將を呼びに來た『一寸失禮します……あの今直ぐ何しますからね』

言ひ捨てゝそゝくさ起つて行つた女將の、髪の毛は柄に似氣なく赤く、高い鬚ばかりが油で黒く光つて居た。幾間かを隔てゝ度々手を叩く音がした。急いで階段を昇る足音もした。離れらしい後の方からは、絶えず爪弾きの音が洩れて居た。

忘られたやうに、かくしてやゝ暫らくを獨り置かれた増枝は、馬鹿々々しさに幾度か起ち上らうとした。

取り散らした縫物に埋つて、いぎたなく居眠つて居た嫂が、やう／＼に歸つた夫に向ける腹立たしげな仕

打ち、それを黙つて見て居る母の時々に閃めく眸、煙管の音が唐銅の火鉢に疇高く響けば、兄は兄とて間の悪るさに無闇と店の者どもを叱り散らした。身を斜に火鉢の猫板に肘をかけて、眼鏡の大きい父は新聞から目を放さなかつた。かくした或る夜の有様がふと頭に寫つた。不愉快な家庭を忌むの念は、意久地のない兄を憎む心と一緒に、陰に陽に、家庭の調和を計つて居る身の愚かさを感じしめた。『私がかうして家に居ればこそ』と、常に兄や嫂の影に心の底で言つて居た

ことを、口に出して言つて遣りたいやうな氣持ちがした。

若い時分のことを反省みて、息子の放埒を叱ることの出来ない父は、其齒痒ゆさ腹たぶしさで、無闇に母に當り散らされる嫁の身を慙れんだ。すること爲すと善いこと惡るい行爲、すべて一々嫁の肩を持つた。嫁は圖に乗つて姑を蔑にした。それを口惜しがる母の背に、酒に狂ふた父の手が飛ばぬまでも、人前を繕ふ笑顔のうちには激しい暗闘があつた。

姑は息子の道樂をひたすらに嫁の罪に歸した。さうして常に其罪を責めるやうな仕向けをした。増枝はいつもそれを遮つて居た。現はすに現はされぬ面白くなさは、母の身體を弱くして其精神を捻ぢさせてしまつた。何とも知らぬ味氣なさは常に其胸を襲つて居た。母を慙れむの情に湧き來る涙も、嫂の仕打ちを憎んで居ながら、其場になればそれを蔽隠ふ、不思議な反抗心に勝てないのを増枝は悲しんだ。

一頻り込んだ飯時の勝手は掃き出されて、臺所には皿小鉢の觸れ合ふ音、帳場の番頭が聲高に新聞の續きものを讀んで居る頃は、煙草入れを腰にさして居た父の姿は早や見えなかつた。古い暖簾の家に一人息子と

生れて、大量な祖父に撫でられて育つた身は、廿歳の年に義理で貰つた分家の娘の窮屈さに苦しんだ。逃れて歩く道こそ違へ、今だに筑碁の仲間を渡つて其日を暮して居る。

家の爲めを思つてやきもきする母は、却て我身の爲めにもならなかつた。婢や子僧は小言のあとを、頬ふくらして陰頭を打つた。氣も心も弱い息子は、ふとしたことから暢氣な場所を知つて其處にのみ足を向けるやうになつた。たまさかに歸つた折は殊更に氣づまりな家といふことを痛切に感じた。

増枝は勝氣な女であつた。學費の半分を貢いで居た遠い縁の醫學生を、父母は娘の夫と心で決めて、望んで止まなかつた女學校へも入れて置いた。増枝が鋭敏い頭はいつもなしにそれを覺つて置いた。けれども醫學生は父母が思ふ通りにはならなかつた。若い美しい女は其妻として増枝が家にも連れられて來た。増枝の矜りは傷けられた。父母のやうに失望はしなかつたけれども、少なからぬ侮辱を感じたのは事實であつた。

或年の秋、心臓を病んだ兄の看護によばれてから再び上京は許されなかつたけれども、汽車賃の入つた財布はいつても懷を放れなかつた。さうした機會は無いで

もなかつたが、其頃はもう、見兼ねて手を出した出入の算盤を放すことは出来なかつた。

諦めやう諦めやうとして二年は過ぎた。隙あるごとに文學雜誌などを漁つて居た頭はいつか其方に傾いて新らしい思潮も知つた。筆もとつて見た。折々に起る縁談。そんなことには耳もかさなくなつた。新らしく燃えたつた上京心は、ともすれば落ち目な家運を白眼に見やうとした。

『あの前田……あのお兄様があちらでお目にかゝりますからつて……』

足音がと思ふ間もなく、先刻の女中が片膝をついて、顔を見て居た。

巾の廣い階段の裏の薄暗い廊下を抜けて突き當りの、いやに敷石のごろ／＼した庭を、簾越しに眺めた一室に女中は導いた。

『増枝、御馳走があるぞ』

入るなり、きちんと坐つた妹を、和めるやうな目をしとかう言つた。其顔をじつと見て、

『兄さん！ 幾日になると思ふんです！』

忿怒の情はむら／＼と押し寄せて、口々に『意久地なし々々』とわめきたてた。

『宜いよ、まあ宜い、今日は歸る、必と歸るよ』

其顔は青かつた。飲めば飲むほど青味を増すが其癖で、『まあ今日は少し緩りして行くさ。おい！』

傍には女が坐つて居た。縞縞に派手な帯を結んで、切れの長い目で増枝を見て居た。

種々な料理は増枝の前に並べられた。賢い妹に對つて坐る度につく／＼吾身の意久地なさを知るのが常である。兄は妹に手をついて詫びたいやうな氣持ちがした。それと直覺つた妹はまた少なからぬ矜りを感じた。矜りを感じた胸には心身ともに弱い兄を慰れむの情も湧いた。

『では今日は歸るんですね？ 必と』

其聲は柔かだつた。

『うゝ、必と歸る……そのなんだね一寸……』

ふと増枝は、さもない時の交情のいゝ兄嫂を思つて不愉快な感じがした。馬鹿々々しいといつたやうな感じもした。

『召し上がれな貴女、ねえ旦那、さア』

女がつとにぢり出たのには目もくれず

『ぢやあ必となんですね？』

増枝は起ち上つた。

『なんだ歸るの？……』

と目を瞠みはつた兄は、ずんぐり起たつて行く増枝を見送つて、やがて、

『……御苦勞だつたね』

と聲を落して言つた。

『おやもうお歸りでございますか、あんまりお僂末そまつさまでしたねえ……あの何ですよ、大丈夫今日はお歸し、ますからねえ、御心配なく……ホ、ホ、』

女將おかみの聲に送られて増枝は門を出た。重い／＼壓迫あつぱくから逃のがれ出たやうな氣がする。軒を並べた瓦斯燈がすとうの街を急ぎ足に低目かしめにすぎで、激烈はげしい香におひの鼻を衝つく病院の裏の近道を抜けた。家に居たとて甲斐のない兄を、何の爲めに自分自身がこんなところまで向ひに來たかを疑ない乍なら、考へて居るやうで頭は何も考へて居なかつた。

ふと街の賑かさに氣付いて顔をあげた。俤くろまは人をのせて走り、荷馬車は荷をつけて歩いて居る。暮れ方の日は東側の軒並深のきなみくさし込んで居た。

半鐘の角かどから三軒目、金看板きんかんばんの高い倉造りの菓種店やくしゆやと並んで、廂ひさしに青く苔蒸こけむしした家の、檐低のきく垂れた暖簾の色は褪めて居た。奥暗い其家を凝じ乎と眺めて居た増

枝は、昔し歸省した或る夜の日記に、『たの楽しいところと懐かしんで、怡々いそ歸つて來た家庭は、此上はと思ふ程、不愉快な所であつた。』と感情に委せてこんなことを書いたのを思ひ出した。

【入力者注】底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

一行の文字数を合せるために、句読点を小さくした箇所があります。

底本…「文章世界」明治四十一年七月

テキスト入力…小林 徹

公開…令和四年三月十二日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)